

「柿」
1915年、絹本彩色
142・0㌢×49・9㌢

速水御舟（1894～1935年）

今年の夏は、猛暑のかわりに、豪雨やら、台風やらで、どうにも落ち着かない日々でした。しかし、9月下旬ともなれば、秋が近づいていることが感じられます。

10月からのコレクションの展示では、「秋の彩り」と題して、秋にふさわしい絵画を展示する予定です。今回は、大正期の日本画界で異彩を放った速水御舟の若い時代の作品を紹介します。

御舟はこの時期、兄事する今村紫紅（1880～1916年）に従い赤曜会に参加。因習的な日本画を改革するために、琳派、南画をはじめ古今東西の絵画、特にポスト印象派の大胆な構図と原色にも関心を寄せていました。

この作品でも、熟した柿の実の強い色彩からは、写生をもとにしながら、自らの感性を表現したいという、若々しい情熱が感じられます。

（田中）

《名画の扉》

大川美術館コレクション展から